

20211016 (社) 北海道自然保護協会主催 藤田講演レジュメ

イントロ (3分)

積丹の海で暮らす海坊主、**ダイバー**のふじたです。

北海道は日本の中でも特異な自然と文化を**持っていた**島です。陸域ではヒグマ、キタキツネ、シマフクロウ、ナキウサギ、そしてつい最近までは**オオカミ**も豊かな自然林の中で**平和に共生**しておりました。**アイヌ**の人たちもまたこの自然を**神**として崇拝し、自然の一員として暮らしてきました。200年ほど前からの本格的な開発まではこの北海道は**原生自然島**だったのです。この豊かな自然を求めて林業、農業、炭鉱業、漁業さらに観光業という**欲の津波**が押し寄せたのです。その結果かけがえのない自然が**一瞬で**消えていきました。しかし、**まだわずかに**残っているのです。全国で**魅力度ナンバー1**の主たる要因が自然なのだと感じています。

残された貴重な自然を守って行くための活動を根気よく続けてこられた北海道自然保護協会さんに心から敬意を表したいと思います。

私は、かねてから陸と海の自然保護活動を**協働**出来ること願っておりました。本日は講演にお招きをいただいたことに対し心から感謝いたします。

演題は「いま、海で何がおきているのか」です。私は話すことは得意ではありませんし、言葉や文字という媒体を介するより、**実際の映像**をご覧くださいことこそ**真実**を伝えられるのだと考えております。

前半の約23分の映像で積丹の海の**多様な**生き物を紹介いたします。後半ではトドの**生態**の様子と**駆除**の実際をご覧くださいます。

途中、3回の質疑と解説を挟みますのでお感じになったこと、疑問など**付度**なくお話を聞きたいと思います。

それでは前半をご覧ください。

●「積丹の海」22分50秒

P-1 10分

30年前から10年前までに撮影した積丹の海の生き物たちの動画です。積丹半島には四季を通して暖流、寒流系の多様な生き物たちが訪れます。魚は一年中定着するおなじみのホッケ、カレイ、アイナメ、カジカ、ホヤ、ナマコなど、対馬海流に乗って夏季に観られるイシダイ、スズメダイ、マダイ、チョウチョウウオなど、冬になると北からトド、アザラシ、オットセイなどの海生哺乳類、春～夏にかけてはカマイルカの大群とクジラが回遊してきます。シャチと遭遇することもあります。積丹の海は北海道でも**最も多様な生き物**を見ることができます。

しかし、10年ほど前からこれらの**生き物が減り**続け、中には全く見られなくなった種も

います。それ以来、海での**撮影はお休み**しています。なぜなら、撮影する**被写体がない**からです。なぜこうなったのかはわかりません。私は研究者ではありませんので論文などは書けませんが、推測するための要因を断片的ながら提示することとは可能です。

陸とは違い、海の中のことはあまりにも**複雑**でその**仕組み**がわかっていません。仕組みを明らかにするためには**継続的な直接観察**が必要です。日本の海に関わる研究者は数多くいると思いますが、この**変貌**を調べている人がいるとしたら、勉強させていただきたいと思います。

さて、要因について少しお話いたします。ここ数年イカナゴ(コナゴ)漁が**不漁**続きです。私は5年前までこの漁の手伝いで漁船に乗っておりました。イカナゴは成長段階で1~3cmをチリメン、3~6cmをコスジ、10cm未満をまとめてコウナゴと呼ばれています。1年以上、15cm以上のオオナゴはトドなどの海獣の餌となります。コナゴ漁で最も**高値**が付くのはチリメンです。30年ほど前は、漁船1隻で漁期1か月1~2千万円の水揚げをしていたという話を聞いています。積丹の漁師さんにとって最も**稼げる魚**でした。しかし、その後年々漁獲量は減って行き、出漁する日はほとんどない状況となりました。成魚になる前に獲ってしまうと生まれにくいわけですから消えるのは当たり前のことです。産卵場所はほぼ決まっており、私の住む幌武意の前浜は積丹でも最も漁獲が多い海域でした。この海域にはタコ、ヒラメ、イカ、ホッケ、カレイなど多様な魚が産卵のためにやってきます。カマイルカもイカナゴを捕食に大群が押し寄せ、朝から夕方まで前浜は生き物たちで賑わいます。

私が考えるもう一つの要因はナマコの桁引き漁です。中国に高値で輸出出来るため、これまで行ってきたひとつづつ選んでやすで突くやり方から海底を**根こそぎさらう**桁引き(底引き)漁法に切り替えることにより僅か**5年で獲り尽く**しました。海底はまさに海の畑です。ミミズが土を育てると同じ働きをするナマコは によって完璧に掃除されました。この漁法は魚の産卵床を壊滅的に破壊するだけでなく、巻き上げた海底の泥を沿岸の海藻が生える岩の上に堆積し、光合成を妨げることになります。コンブやワカメが生育しないためウニやアワビも育ちません。

幸いなことに、漁業の手が届かない僅かな海域には海藻と魚が残っています。(バリホール、神威岬、武蔵堆)北海道で海岸沿いに道路がないのは、知床半島の70数キロと積丹半島の20数キロです。断崖が続くため工事が出来ないためです。そのおかげで比較的**自然環境**が保たれていると考えています。幌武意はその中心に位置しています。

定置網の設置は海底に大量の土嚢をロープとともに回収されずに残されます。土嚢は破れ中の泥は周りに堆積してゆきます。ベントス生物は生きてゆけません。

美国に宝島という島があります。その南東には30年前までは**アマモ**が**群生**していました。アマモはコナゴ、タナゴ、ヨウジウオ、イワシ、アジなどの小魚たちの絶好のゆりかごと言われています。1年中入れっぱなしの小定置網の土嚢で根が寸断しアマモは絶滅しました。同時に魚も消滅しました。

20年前に幌武意漁港内に30mほどの防波堤工事を行いました。北東からの波から漁船を

守るためです。当時は港内で法的規制はなく、地元の漁船のプロペラに絡まったロープを取る作業で潜水しておりました。海底には特大のアサリ貝が一面に敷き詰められていましたが、工事が完了した次の年には死んだ貝殻だけが残され、見事に消滅しました。小さな漁港でのわずかな潮流の変化で貝が絶滅するのは驚愕でした。貝だけでは収まらずこれまで棲んでいた生き物もほとんど消えました。

室蘭の小さな漁港でマツカワカレイの養殖仔魚を10万匹放流する場面を水中撮影してほしいとの依頼がありました。その後の生態系がどうなったか恐ろしくて見たくありません。

海の保全是陸と同様、手を加えないこと。獲りすぎないことです。より豊かな生活を求めるのではなく、生存するために必要な最小限であることです。「自分の倉に蓄えるのではなく、自然の中に残すことが真の豊かさである」というアイヌの人たちの生き方から学ぶことができます。「知足」とはそのことです。

(質疑／解説) 5分

後半はメインテーマ「いま、海でなにがおきているのか」です。この映像は報道などでは伝えられることのない現実の様子です。

● (トドの生態映像) 3分43秒

P-2 3分

11月下旬から6月上旬にかけてサハリン、千島列島から野生のトドが北海道に回遊してきます。日本海では南は積丹半島から北は宗谷岬にかけてです。オットセイが繁殖時期以外は洋上で暮らすのに対して、トドは岬の先端近くや沿岸の岩礁に上陸して休憩し、その近くの比較的浅い海域でホッケ、ミズダコ、ホテイウオ、カレイなどを採餌します(ホールアウト)。通常は10頭前後の群れを単位として生活しています。上陸場所には多くのグループが集まります。神威岬メノコ岩(150頭)、幌武意マッカ岬(20頭)、雄冬岬(300頭)、浜益(50頭)、祝津トド岩(200頭)、宗谷岬弁天島(2,000頭)で観察できます。その構成は成獣から幼獣、雌雄の区別は特にありません。幼獣は最長で2年間母親から授乳を受けると考えられています。上陸時は個体間やグループ間の区別はなく混然一体となっており、争いは全く見られません。平和的で社会性が伺えます。海の中での行動は陸上にいる時とは全く違い大胆で優雅です。

私たちは生後1か月前後の幼獣につけられた標識に注目しています。この標識は回遊ルートの解明のためにロシアの研究者(ブルカノフ博士を中心に)たちが毎年繁殖場でつけたものです。左わき腹につけられた標識は上陸時の体の向きによって観察できることがありますが左を下にして休んでいる時や水面遊泳時にはほぼ不可能です。トドは好奇心が強いためダイバーのすぐ近くまで近づいてきて、カメラを覗き込み、甘噛みすることもあります。そのため標識を撮影することはそう難しくはありません。撮影データはSealionsclub 東京

の西野がホームページで公開し、ロシアはじめ世界の研究者と共有しています。

(質疑／解説) 5分

●駆除の現実

P-3 2分

害獣として毎年冬から春にかけてトドの駆除が行われています。トドは日本では漁業被害を与える害獣とされ1958年から駆除されてきました。多い年には1,000頭を超える数が殺されました。1994年以降は国際的な環境保護団体の指摘に対応するため116頭の駆除枠が設定されましたが、実際にはこの数をはるかに超えて駆除が行われています。その理由は、監視体制が全くなく回収され報告された数であること、トドは撃たれると数分以内に海没してしまい回収が極めて困難であること、何よりも私たちダイバーが海底に沈んだトドを数多く実際に目撃、撮影してきました。その数は統計には含まれていません。腐敗して漂流、漂着したものもかなりあります。1958年～93年までの統計を基に推定しますと報告頭数の6倍が殺されていると考えています。現在の駆除枠500頭を超えておりますので恐ろしい程の駆除が行われていると思います。私たちは毎年駆除船に同乗させてもらい撮影してきましたが撃たれて沈み回収できないことを知っています。

●駆除映像 7分

P-4 4分

日本の関係行政機関は、個体数と食性に関する調査研究が中心で、この分野は後回しとなっています。絶滅危惧種の保護と回復にはトドに関してはまだまだ先のことのようにです。2005年知床世界自然遺産登録時のIUCN勧告に対する日本政府の対応、生物多様性条約締約と国内環境関連法の整備(鳥獣保護法、自然公園法、種の保存法、生物多様性基本法)はいまだに足踏み状態で、現在中国で開催中のCOP15において政府が野生動物の保護に対してどの程度積極的な対応をするのかは疑問です。

実際に駆除に関わる人たちは、被害を受けている零細漁業者とハンター、それに解体業者です。ハンターは漁業者でないこともあります。それぞれ日当、備船料、解体料を受け取って収入の足しにしています。その金額は僅かですので被害を補填するには十分とは言えません。

魚が減りトドも漁業者も絶滅危惧種と言える気がします。漁業被害の約半分は漁獲高であとの約半分は漁具被害です。前者は網が破られなかった場合に獲れたかもしれない推定漁獲高です。これに対して漁具被害は現実を反映した金額と言えます。しかし国、道から補助されることはなく、駆除数を増やし続けるだけの政策が続いています。駆除による漁業被害軽減に関してこれまで一度も検証されたことはありません。(テレビ朝日テレメンタリー

「トドの眠る海」管轄する行政機関の担当者は「駆除は漁業者に対しての安寧効果」と明言していました。大型の定置網、トロール漁法など沖で根こそぎ獲り尽くすことで沿岸に産卵に来る魚は激減し、その結果沿岸漁業は成り立たなくなっていました。

質疑／解説 5分

まとめ 1分

日本は世界の中で EEZ（排他的経済水域）自分の海の**権利**を 6 番目に有する国です。（陸域は 60 番目です）自国の海を守る**義務**があり、食料自給率を上げる基本だと思います。

生命の誕生は海から生命が誕生し、陸上へ上がり多様化していきました。

トドは海では最上位の捕食動物です。それを支える生き物すべてが**共生**してゆかなければ人間も生きられなくなるはずです。

Life in harmony into the fuature COP10

自然対人間ではなく、人間は**自然の一部**として**自覚**し、**行動**する義務があり、それを怠ると**天罰**が当たることとなります。コロナウイルスもまた自然の一員なのでしょう。

自然を保護するという高慢な考え方ではなく、**自然から学び従う**という謙虚な心が大切です。

環境とはそれを取り巻くもの、とするならば陸とそこで暮らす私たち人間にとってはまさに海のことです。

「海が先生」です。

聴講頂き有難うございました。

（質疑と回答）

プロジェクト AWARE パワーポイント

20211016

Sealionsclub ふじたひさお

●談話会会場

場所：一徹（狸小路7丁目、011-221-1451）

時間：17時～

会費：5千円（飲み放題付き宴会コース）